

銭形平次捕物控

人形の誘惑

野村胡堂

青空文庫

一

新吉は眼の前が真つ闇になるような心持でした。二年越し言い交したお駒が、お為ごかしの切れ話を持出して、泣いて頼む新吉の未練さを嘲るあざけように、プイと材木置場を離れて、宵暗の中に消え込んでしまったのです。

——父親が聴いてくれないから、末遂げて添う見込みはない。出世前のお前さんに苦勞をさせるより、今のうちに切れた方がいい——というのは、十八や十九の若い娘の分別というものでしょうか。

——父親が不承知は今に始まったことではない、版木彫りの下職に、なにほどの出世があらう——と詰め寄ると、お駒は唯もう父親の不承知一点張で、取付く島もないような冷たい顔をして、——これからは逢つても口を利いておくれでない、つまらない噂を立てられると、お互のためにもならないから——そんな念入りの事まで言つて、美しいおもかげだけを残して、一陣の薰風のように立去つたのでした。

「新さん」

不意に、後ろから声を掛けた者があります。

「……………」

黙つて材木から顔を離して振り返ると、肩のあたりへ近々と、

お駒の継母のお仙が、連れ子の少し足りない定吉と一緒に、心配そうに立っているのです。濡手拭ぬれてぬぐいを持っていてところを見ると、町内の銭湯へ行った帰り、夜遊びに出た愚かな倅せがれと一緒になつたのでしょう。もう十九にもなる定吉は母親の後ろから顔を出して、大の男の泣くのを、世にも不思議そうに眺めております。

「新さん、お前さんは可哀想だね。——聴いちゃ悪いと思っただれど、出逢頭であいがしらで、逃げることも隠れることも出来ないんだもの、みんな聴いてしまったよ」

「……………」

「あの娘こはね、あのと通りの気性者だから、お前さんの気持も考えずに、ポンポン切れ話をするんだろう」

「……………」

「新さん、お前さんの前だから言うんじゃないが、私は蔭かげながら随分骨を折った積りさ。生さぬ仲の遠慮はあるにしても、あんまり勝手で見ていられないから、——どんな事があっても、新さんを捨てちや冥みようり利せなが悪い、もう一度考え直すように——ってネ」

お仙は新吉の背せなでもさすつてやりたい様子でした。房五郎の後添い、お駒のためには継母に相異ありませんが、本当によく出来た人で、三十八九にしては若々しい容きりよう貌と共に、町内でも褒めものの女房だったのです。

「……………」

新吉は恐ろしい激情に打ちひしがれて、口もきけない様子でし

た。二十一にもなっているくせに、気の弱い生れ付きで、男前でも立派でなければ、親分手合の房五郎の娘と、割ない仲になるよ
うな、大した貫禄の人間ではなかったのです。

「新さん、短気を起しちやいけないよ、またそのうちに良い話があるかも知れない。——私じゃ大した力にもならないが、夫の罪^{うち}亡ぼしもあることだから、出来るだけの事はしてあげたい」

せめてこの母親の半分もお駒に真心があつたら——と新吉はまた新しい涙を誘われました。

「おつ母^かア、帰ろうよ」

倅の定吉は、二人の話に退屈して、グイグイと母親の袖を引きます。

「とにかく、あまりクヨクヨしない方がいいよ。今まで通り、時々には家へも遊びにも来るんだネ。明日の晩は節分で、夫はうちの参会があつて浅草へ出掛けるし、私は定吉と明神様へお詣りに行くから、その間に來て、よくお駒と話してみてはどう？ お駒だって、父親の言う事や、持参付のむこの事ばかり考えているわけでもあるまいから」

「えッ、持参付の贅？ それは一体誰のことです」

思いも寄らぬ話に、新吉は愕然とした様子でした。お駒が急に冷淡になつて、愛想尽かしと言つてもいいほどツケツケ物を言つた原因が、継母のお仙の口からはつきり知つたような気がしたのでした。

「おつ母ア、帰ろうよ」

定吉はグングン母親の手を引きました。十九と言つても、智恵の足りない子のかえつて身体からだの育ちがよく、十三十五の町の少年達と遊んでいます。が、身体からだだけ見れば、立派な一人前の若い衆で通るかつぶく恰幅かっぶくだったのです。

二

「新吉、諦めた方がいいぜ。親爺も親爺なら娘も娘だ。あんな犬畜生にも劣つた雌に、未練を残すことがあるものか」

あく翌る日の昼頃、新吉には義理の兄の岩松が、煮えこぼれるほど

腹を立てて歸つて来ました。人を害めて島流しにされたことのあ
る人間ですから、どうせ物優しい男ではありませんが、三十を越
して、めつきり物静かになった兄哥あにきが、こんなに腹を立てたのは、
一緒に住んでいる新吉もあまり見たことがありません。

「兄さん、何をそんなに——」

新吉は言いかけて口を緘つぐみました。お駒を犬畜生にする岩松に、
反感らしいものを持たないではありませんが、そうかといって、
この気の強い義兄あにに、楯を突くことなどは思いも寄らなかつたの
です。

「お駒は角の酒屋の次男坊と一緒になるんだとよ、持参付の智だ、
こちとらは傍へも寄り付けるこつちやねえ」

「えッ、やはりあの辰之助と——」

昨夜お仙の言ったことが、ゆうべ犇々ひしひしと思い当ります。

「打ち殺してもやりてえが、——あの女には、お前まだ未練があるだろうねえ」

「いえ、兄さん」

「そうじゃねえ。俺の眼は見通しだ。昨夜からお前、ろくに物も食わないじゃないか」

「……………」

「あの親父の房五郎は、四年前の明神様の大喧嘩の時、二三人ならず人を害あやめている。女房子があるし、年も取っているから、可哀想だと思って、若い俺が一人で罪を背しよ負ってやったんだ。俺が

あの時ペラペラ申上げてしまえば、今頃は三宅島の土になつてい
る野郎だ」

「……………」

岩松の憤激はもつともでした。明神様の境内で土地のやくざが大喧嘩を始めた時、年が若くて一本調子で、^{むく}酬いられない苦勞をするのを、一番男らしい仕事と思い込んでいた岩松は、房五郎の分まで罪を背負込んで、三宅島へ流されたのは四年前の夏、上様御不例やら、勤向きの神妙さやらで、許されて江戸に帰つたのは、ツイ半年ばかり前のことだったので。

「俺が島から帰つて来ても、ろくに挨拶もしねえ。義理を知らねえ野郎だと思つていると、挨拶の出来ないわけがあつたんだ。な

ア新吉、手前も薄々聞いているだろうが、あの房五郎の野郎は、俺が島から帰って来るのを煙たがって、御赦免の噂が立つと、内々俺だけその御沙汰に漏れるように、お役人へ手を廻して頼み込んだって言うじゃないか」

「……………」

新吉は返答に困りました。房五郎が恩人の岩松が島から帰るのを邪魔したという噂はありましたが、お駒の父親だけに、そんな事があるとは、信じたくなかったのです。

「房五郎の野郎、打ち殺しても飽き足らねえ野郎だが、ただ野良犬のように殺したんじゃ胸が治まらねえ。——俺はこの間から、どうして思い知らせようか、そればかり考えているんだぜ」

「……………」

義理の兄ながら、人殺しの兇状持で、世間から白い眼で見られている岩松、——性根の良いことは一緒に暮している新吉が百も承知ですが、一たん思い立つと、何をやり出すかわからない、恐ろしい激情家でもあったのです。

「そこでな新吉、俺は大変なことを思い付いたんだ。お駒とお前が仲の好よいうちは、俺はその気にもならなかったが、今となつちや止められる心配もあるめえ。——大きな声じゃ言えねえが、房五郎を苦しめるのは、自慢の娘のお駒をどうかするのが一番だ」

「兄さん」

「黙って聞け」

「兄さん、後生だから、そんな事は止して下さい。捨てられたのは私の腑甲斐なさで、お駒に少しも悪いことはありません」

新吉は、兄の腕にも膝にもすがり寄って、その無法な企てを止めたい心持でいっぱいでした。

「馬鹿野郎、そんな弱気だから、女の子にまで舐められるんじゃないか。俺のするのを黙って見ているがいい。——今晚は房五郎も女房のお仙も、あのばか息子の定吉も留守だってえじゃないか。こんな折が減多にあるものか」

「兄さん、そればかりはどうか」

「ならねえよ。疑いが手前に掛りそうだと思うなら、飛離れた遠方へ行つて、亥刻よつ（午後十時）前は本郷神田界限に寄り付かねえ

工夫をしろ」

「兄さん」

新吉の言葉や思惑などは、耳にも入れてくれる岩松ではありません。まだ三十を越したばかりですが、顔立も気性も、島の三年の苦役で、すっかり荒されて来たのです。

三

その晩、房五郎の娘、本郷小町といわれたお駒は、三組町の自分の家の、長火鉢の前で殺されておりました。

房五郎は評判のよくない男ですが、お駒は本郷切つての人気娘

で、近いうちに、町内の酒屋、越後屋の次男の辰之助が持参付で入聲するという評判が立っていただけに、この殺しはその晩のうち、町内中に聞えてしまったのです。

見付けたのは継母のお仙、ちょうど節分の晩で、明神様へお詣りして、夜店などを一と廻り見て、何心なく帰って来ると、長火鉢に凭れた^{もた}まま、お駒はこと切れていたのです。

前髪を焦すような恰好で坐って、四方は血の海、^{あたり}後ろへ廻ってみると、鋭い切出しが、左貝殻骨の下へ、真っ直ぐに突っ立っていたのでした。

母のお仙と一緒に明神様から帰って来た定吉は、血を見ると有頂天になって騒ぐのを、お仙はどんなに骨を折って押え付けたこ

とでしよう。

そのうちに騒ぎを聞付けて近所の衆が集まり、見廻り同心の出役があつて、町役人立会の上、一と通り検死が済んだ頃、主人^{あるじ}の房五郎は浅草から歸つて来ました。

定吉は女房の連れ子、房五郎にとつてお駒は天にも地にも掛替のない一粒種で、日頃の可愛がりようも並大抵でなかっただけ、その悲歎は見る目も気の毒でした。

「畜生、——下手人はあの版木屋の新吉の野郎に違え^{ちげ}ねえ、——仇を取つておくんなさい」

鬼のような房五郎が、ポロポロと涙をこぼして、立会の役人の袖にすがる有様は、あまりの凄惨さに、見る者の顔を^{そむ}反けさせま

した。

来合せた御用聞、真砂町の喜三郎は、すぐ新吉兄弟の家へ飛んで行きましたが二人とも留守、半刻（一時間）ばかり待って、亥^よ刻半（午後十一時）頃、フラリと帰って来た新吉を、有無を言わず引つ括^くつて、房五郎の家の現場へ伴れて来ました。

「親分、どうしたというんで——」

「白ばつくれるな、新吉、手前の仕た事を見せてやるから」

現場にはまだ同心も町役人も居りました。戸口に立ち塞がる人波を掻き分けて入ると、中の血の海も、お駒の死体もそのまま。

「あッ、とうとう——」

一目見ると新吉は、真っ蒼になって、ヘタヘタと坐ってしまっ

たのです。

「野郎ツ、何がとうとうだ、——昨夜この娘に、小つぴどく振り飛ばされたっていうじゃないか。お前がやらなくて、誰がこんなに虐たらしい事をするものか。よくその怨めしそうな顔を見ておけ」

死んだお駒の肩を取って後ろへ引くと、血の気のうせた真つ白な顔は、ガクツと上を仰いで、ちょうど新吉の顔とピタリと合いました。蠟のような透き徹る娘の顔には、不思議なことに、何の怨みも驚きもなく、幸福な思い出し笑いが浮んでいそうで、かえってゾツとさせるものがありました。

「お駒」

新吉は一步近づきました。が、次の瞬間、恐ろしい激情がこみ上げたように、火鉢越しに這い寄って、その真つ白な死に顔へ、自分の顔を寄せようとするのです。

「巫山戯^{ふざけ}たことをしあがる。——手前なんかに馴々しい事をされちや、お駒が浮ばれめえ。来あがれ」

パツと縄尻を引くと、新吉は操り人形のように、ヨロヨロと立上がつて、声もなくさめざめと泣き出すのでした。

「この切出しは手前のだろう。版木屋か、彫物師でもなければ使わない道具だ。柄^えに籐^{とう}を巻いて、端^{はじ}つこに（新）という字が書いてある」

お駒の背から抜いた血染の切出し、紛れもなくそれは、新吉の

仕事場から持出したものです。

「それは――」

「知らねえとは言わさねえよ。とにかく、番所へ来あがれ。旦那衆のお調べを願ってやる」

真砂町の喜三郎は、功名に陶醉した心持で、ピシリと縄尻を鳴らしました。まだ三十台の売出し盛り、ツイ功名を急ぎ過ぎる癖はありますが、この稼業の者にしては、物のよく解った男だったのです。

四

「親分、あれを聞きなすったかい」

「なんだ、八」

「お駒が殺されたって話——」

「そうだってネ、可哀想に。房五郎は憎い男だがお駒は気の毒さ。もつとも、あんなに綺麗じや随分殺したい者も多勢あったろうが」
捕物の名人で、江戸開府以来と言われた御用聞、銭形平次は、
子分のガラッ八こと、八五郎を迎えていつにもなくこうしんみり
しました。

「それがあべこべなんで、親分」

「何があべこべだ」

「憎いのはお駒で、可哀想なのは房五郎だ——という町内の評判

ですぜ」

「ハテね」

「お駒の阿魔^{あま}は、二年越し言い交した、版木屋の新吉を振り捨てて、越後屋の辰之助を、持参金三百両で贄にすることになったんで、新吉はカツとなつて、仕事場から切出しを持って来て殺^やつつけたんだそうですよ。親父の房五郎は大病人同様、今日は枕も上がらねえ騒ぎだ」

「下手人は新吉と決つたのか」

平次は静かに問いかけました。

「最初は知らぬ存ぜぬで頑張つたそうですよ。昨夜は宵の口から亥^{よつ}刻（十時）前まで、本所の友達のところまで、花合せをやつて遊

んでいたと言うんで、真砂町の喜三郎あにき兄哥も持て余していました」

「フーム」

「その本所の友達のところを当ってみると、なるほどそれに違いない。証人が七人、少し多過ぎるくらいだ。その上、新吉は日頃
にない大はしやぎで、自腹を切って一升買って、みんなに振舞つて大騒ぎをやったんですぜ」

「……………」

「帰ったのは亥刻よつ少し前、——どんな手品を使ったって、お駒を殺せるわけはねえ。継母のお仙は、戌刻いつつ（午後八時）に出かけて、
亥刻よつに帰った時は、お駒は間違ひもなく死んでいたんだ」

「俺が叱られているようだぜ、八」

ガラツ八の氣組の面白さに、平次もツイ笑いました。

「それでも新吉が下手人だと言うなら、はばか憚りながら真砂町の兄
もヤキが廻ったネ」

「つまりねえ事を言うな」

「今売出しの真砂町が聞いて呆れらア、暮の商売じゃあるめえし」
八五郎が好い心持に啖たんか呵を切っている時でした。

「今日こんにちは、——錢形の兄哥は居なさるか、あつしは」

噂をすれば影で、戸口へ来たのは真砂町の売出し、喜三郎が立
つていたのでした。

「あッ、しまった」

八五郎は尻尾を巻いて逃げ出そうとしましたが、その時早く、

お静に案内された喜三郎は、ニヤリニヤリと笑いながら入って来たのです。

狭い住居、もとより先刻さつきの威勢の良い啖呵が、門口に立っていた喜三郎に聞えなかったはずはありません。

五

「今までの経緯いきさつは、八五郎兄哥あにいから聞きなすつたろう。証拠が山ほどあるし、お駒を殺すほど怨んでるのは、新吉の外にはないはずだが、困ったことに、お駒の殺された時刻は、酒と花合せに夢中で、新吉は小用こようにも立たないと解っているんだ」

「……………」

深々と腕を組んだ平次を前に、喜三郎はこう語り進みました。

「それだけなら、外^{ほか}の下手人を捜せばいいわけだが、もう一つ困ったことがあるんだ」

「……………」

「新吉が殺すはずはないと解つて、帰そうとすると、——実はお駒を殺したのはこの私で——と新吉本人が言い出したんだ」

「へエ——、それは面白いな」

錢形平次の頬はようやく^{ほころ}綻びました。

「俺にはどうも面白いとは思えねえ。最初殺した覚えはないと言つたが、本所の友達の家から一と足も出ないと解ると、殺したの

は俺だと言ひ出しあがる。——外^{ほか}にお駒を殺す者はなし、こんな弱つたことがない。どう考えても解らないから、兄^{あにき}哥へ智恵を借りに来たんだが、——どうしたものだろう」

喜三郎は若くて淡白でした。近頃江戸中を圧する平次の名声を妬^{ねた}む色もなく、同じ御用を承る身の恥を忍んで、こう智恵を借りに来たのです。

年の頃も平次と同年輩、平次の抜群の男前に比べると、少し頑固で無器用ですが、江戸ツ子肌らしい、物にこだわらぬ氣象が人に親^{あに}しませます。

「兄^{あに}哥、有難え、こつちからお礼を言うよ。——実は俺にも少し考えがあつたんだが、縄張がうるさいから、黙っていたんだ。——

「兄哥でもなきア、こんな事を淡^{あつさり}白相談に來ちやくれまい」

平次は両掌^てを揉み合せて喜んでおります。

「そう言われると俺も器量がよくなるが、実はここの入口に立つた時は、穴へでも入りたかつたよ」

「八の野郎がとんでもない事を言やがるからだ。——氣を悪くしないでくれ、後でうんと油を取っておくから」

平次の話を聴くと、ガラツ八は向うの方でピヨイピヨイとお辞儀をしております。膝小僧がハミ出した狭い^{あわせ}袷^{まげ}、髻^{まげ}の刷毛先の、神田っ子らしく、左へ曲っているのも間が抜けます。

「八兄哥に悪いことは少しもない。——ところで兄哥、町内の若いのを、虱^{しらみ}潰^{つぶ}しにしらべたが、お駒と引つかかりのあるのは、

新吉の外には一人もねえ。泥棒にしては無くなった物がないし、

――

喜三郎はもう用談の方へ入っております。

「お駒は入口へ背を向けていたろうか」

と平次。

「いや、入口の方へ顔を向けて、刺された背中はお勝手を向いていた」

「お勝手の戸は？」

「内から締めて、輪鍵が掛っていたはずだ」

「お駒に気が付かないように、下手人は後ろへ廻れないわけだね」

「そのとおりだ。――下手人はお駒のよく知ってる者とまでは俺

も見込みを付けた」

喜三郎もこの時ばかりは得意そうでした。

「お駒が長火鉢の前へ来て坐る前に入り込んで、押入かどこかへ隠れていたとしたら？」

「さア、そこまでは——」

平次の疑いはもつともでした。これは決して考えられないことではありません。

「お駒の死体を見た時、新吉はなんて言つたろう」と平次。

「それはよく判っているはずだ。死体を見ると新吉はいきなりあッとうとう——と言つたように思う」

「それで沢山だ。新吉は下手人じゃない、が、誰かを庇^{かば}っている。とにかく、行ってみるとしようか」

こうして平次はいよいよこの事件に乗出す気になったのです。

六

その日の夕刻、新吉の義兄^{あに}の岩松は番所に呼出されました。

事件が重大と見たのか、与力笹野新三郎出役、真砂町の喜三郎と銭形平次が腰縄を打たれた新吉を調べております。

「岩松、隠しちや為にならねえよ。弟分だと思つて、庇い立てをする、かえつて不都合なことになるよ」

釘を一本刺した上、いろいろ新吉とお駒の關係を問いただし
た。

「新吉はそんな大それた事の出来る人間じゃございません」

岩松は一生懸命弟のために弁解しましたが、結局、弟の上にか
かる疑いは、容易に霽れるものでない事を吞込まされただけの事
でした。

「岩松、気の毒だが、新吉は免れようはねえ。自分でお駒を殺し
ましたと、白状しているんだ」

「そんな事が、親分」

岩松は百方弁解しましたが、本所に亥刻近くまで居たという、
新吉の不在証明を知らなかったので、この上は救う道も尽きてし

まっただと思つたのでしよう。

「帰れ。もうよい」

喜三郎に冷たく言われると、思い定めた様子で、最後の切札を投げてしまいました。

「親分、聴いておくんない。——出来ることなら隠しおおせようと思いましたが、弟の新吉がおしおき処刑になるのを見ちやいられません。何を隠しましょう、お駒を殺したのは、この私で——」

「何だと？」

「何べんでも申します。お駒を殺したのは、この岩松に相違ございません、——お駒の父の房五郎は、私に罪を背負わせて四年前島へ送らせた上、御赦免になつて江戸へ帰るのを邪魔し、一人で

好い児こになろうとしたほどの悪党でございます。打ち殺すのはわけもないが、一と思いに殺しちや、苦しめようが足りないから、眼の玉のように大事にしている、房五郎の娘を殺してやりました。——弟の仕事場から、切出しを持って行つたのが大縮しくじり尻で、何にも知らない弟に罪を被かぶせちや、見ているわけに参りません。弟がお駒殺しを白状したなら、それはこの兄を庇うためで、——氣の弱いあの野郎にしちや、一代の大出来でございます」

岩松の白状は予想外でした。いや、予想外であるべきはずですが、平次も、喜三郎も、笹野新三郎も少しも驚く色のなかったのは何としたことでしょう。

「嘘を吐つけッ」

「ヘッ」

平次の声は辛辣しんらつに岩松の口を緘とぎしました。

「お前はどうせ島帰りだから、世間の人に白い眼で見られるよりはと、弟の罪を背負って行く積りだろう」

「とんでもない、親分」

「それじゃ聞くが、切出しは弟の仕事場から持出して、どんな具合にして持つて行ったんだ」

と平次。

「手拭に包んで、懐中ふところへ入れて行きました」

岩松はスラスラと言って退のけます。

「その手拭の模様は？」

「白と浅黄の染分けで、真ん中に橘たちばなの模様があります」

「フーム」

平次は思わず唸りました。

「それに違いないでしょう、親分」

岩松は番所の隅に小さくなっている弟の新吉を顧みながら、なんとなく重荷でもおろしたような顔をしています。

「その手拭はどこへやった」

平次は追及の手をゆるめません。

「血が付いたので、どこかへ捨ててしまいました」

「ところで、もう一つ訊くが、お前が入った時、お駒はどこにどうしていたんだ」

「長火鉢に凭もたれておりました」

「声を掛けたか」

「いえ、そんな事をしちや声を出されて失策しくじります。格子戸から飛込むと、障子を開けて、いきなり長火鉢に凭もたれているのを、後ろから突いてしまいました」

「格子を開けた時気が付かない様子だったのか」

「定ちゃんかい——と言いました」

岩松の話は、疑う余地のないほど判然はつきりしておりますが、平次

は喜三郎と笹野新三郎を顧みて、何やらうなずき合いました。

「岩松、お前めえはとんでもねえ野郎だ」

「へエ、——相済みません」

「お駒は入口の方へ向いていたぞ。声を掛けずに後ろから刺せるわけはない」

「ヘッ」

「お前のように物騒な人間が入って行けば、第一若い娘は声を立てる。近所はあのとおり近いが、誰もお駒の声を聴いた者もない」

「……………」

平次の話は予想外なことばかりでした。

「それから、お前の手拭——橘の模様のある染分けの手拭は、血も何にも付かずに、お駒の殺された隣の部屋ほうの押入に投り込んであつたよ。これはどういうわけだ」

「……………」

「新吉を庇い立てするのもいいが、ウソはもう少し器用に吐くものだ」

平次の明察には、一言の抗いあらがようもありません。

「恐れ入りました、——」

岩松はしたたか者らしい頭こうべを垂れて、しばらく唇を噛みます。

「それみろ。——ところで、本当の事を聴かして貰おうじゃないか。岩松、お前はお駒を殺す気で、弟の細工部屋から切出しを出し、橘の模様の手拭に包んで、お駒の家の前まで行った事は本当だろう。それからどうした」

あまりによく知り過ぎている平次の言葉に、岩松は飽気あつけに取られてその顔を眺めておりましたが、思い直した様子で、こう続け

出しました。

「恐れ入りました。それに相違ございません。房五郎への怨み、弟の歎き、お駒を殺して胸を晴そうと、あの格子まで開けましたが、障子一重ひとえというところでお駒に声を掛けられ、急に気が変わったのでございます。——一生島で朽ち果てる積りなのが、たった三年で江戸へ帰ったのも何かの運、このまま安穩に暮せるものを、つまらない怨みや意気張りで、若い女一人を殺せば、今度は私も命がありません。恥かしい事です、急に命が惜しくなって、後をも見ずに逃げ帰り、友達の家で夜更けまで飲んだようなわけでございます。翌あくる日、弟が縛られたと聞いて、私の腑甲斐ないのに腹を立てて、新吉がやったのかしらと、一応は思いましたが、

この男は生れ付きの善人で、気の弱い事この上なしですから、人を殺せるはずはありません。これには何か、深い仔細がございましょう。親分、旦那、どうぞ、もう一度調べ直して弟を許してやって下さいまし」

岩松の言葉には、もう掛引も偽うそもあろうとは思われません。それを聞いて一番驚いたのは、隅の方に蹲うずくまっていた、縄付の新吉でした。

「兄さん、有難い。——兄さんのした事とばかり思い込んで、身に覚えのない罪を引受けたが、兄さんが潔白と判れば、もう心配することはない。親分、私は何にも存じません。あの晩兄の見幕が恐ろしかったので、私は臆病なようだが、兄に言われたとおり、

本所へ逃げて行つて、亥刻までは家へ歸るまいと思つたのでござ
います」

気の弱い新吉は、自分の臆病さを責めながらも、不在証明を拵
えずにはいられなかつたのでしよう。

後で兄に疑いが掛りそうなのをみて、急にお駒殺しが自分の仕
業だと言ひ張つたのは、兄に対する自分の腑甲斐なさの申訳でも
あつたのです。

「……………」

平次も喜三郎も、笹野新三郎も、何にも言ひませんでした。こ
の様子では、新吉はまだ許されるか許されないか、見当も付かな
かつたのです。

七

疑いは当然継母のお仙の方に向いました。

恐ろしく丁寧な家探しを繰り返しましたが、しかし、何にも新しい証拠は出てきたわけではありません。

お仙は思いのほか心掛けの良い女だという証拠と、お仙の連れ子の定吉が、妹分のお駒に懸想^{けそう}して、蚯蚓^{みみず}ののたくったような手紙を書いて、人の悪いお駒に翻弄されていたことが判ったくらいのものでした。

「お神^{かみ}さん、明神様へは、定吉と一緒に رفتんだね」

「ハイ」

番所に呼出されたお仙は、何の思い煩う様子もなく神妙に答えます。

「時刻は？」

これは喜三郎でした。

「家を出たのは戌刻いっつ（八時）頃、近いところですからブラブラ行つて、亥刻よっ（十時）ぎりぎりに帰つて参りました」

「定吉と離れたことはなかったのか」

と喜三郎。

「明神様へお詣りをしてから、定吉は境内にある見世物が見たいと申しましたが、私は頭痛持で、あんなものを見ると、眠られな

くて困りますので定吉だけを入れて、私は一人外に待っております」

「時刻にして、どれほどだ」

「半刻ともかかりません」

「見世物はなんだい」

「竹田人形でございます、暮からズーツと掛っております」

「フーム」

喜三郎は唸りました。定吉と半刻でも離れていたとすれば、その間に三組町まで飛んで来て、お駒を殺して、また元の場所へ帰られないものでもない——と思ったのでしよう。

平次はお仙の顔と、喜三郎の顔を等分に見比べておりましたが、

「真砂町の、済まないが、俺にちよいと任せては貰えないか、少し訊いておきたいことがあるが」

変なことを言い出します。

「いいとも」

喜三郎は素直に身を引きました。お仙に関わる疑いが濃厚になると、平次に任せて、もう少し証拠固めをしておこうと思ったのでしよう。

「お神さん、——つかぬ事を訊くようだが、平常ふだんお前さんとお駒との間は、どうだったろう？」

「ハイ」

「正直に言つて貰いたいが——」

「表向きは何にもございませんでしたが、やはり生きぬ仲で、お互に辛いことも、泣くこともございました」

お仙の言葉は思いの外でした。

「喧嘩をするような事もあつたらうな」

「お恥かしいことでございます」

「お駒が死ねば、房五郎の跡取は定吉ということになるだらうな」
平次の問はいよいよ突っ込んだものでした。

「そんな事になりましたか」

「房五郎の身しんしょう上はどんなものだらう」

「あのと通りの渡世で、何ほどのものもございません」

「房五郎はお駒を大層可愛がっていたそうだが、お神さんは良い

心持ではなかつたろうな」

「何とか良い心持になろうと骨を折りましたが、みんな私の至らぬからで」

お仙は涙ぐんでゐる様子です。

「定吉とお駒と一緒にするような話はなかつたろうな」と平次。

「一つ違いで、兄妹と言っても、赤の他人ですから、本人同士がその気なら、一緒にして一生側で暮したいと思いましたが、こればかりは親の儘ままにもなりません、定吉はあのとおりで——」

「定吉はお駒のことをどう思っているだろう」

「それはもう、お駒は綺麗ですし、定吉も年頃の事で——」

ここまで行くとお仙^{せん}ははつと言葉を切りました、うつかり倅の定吉——あの智慧の足りない定吉に、あらぬ疑いが行つてはならぬと思つたのでしよう。

「それで？」

平次は素知らぬ顔で次を促しました。

「親分さん、定吉は私と一緒に出かけ、私と一緒に帰っております。ほんの四半刻ばかり、見世物の中へ入ったきり」

「解った解った、心配することはないよ、お神さん」

平次はそう言つてこの調べを打ち切りました。

「錢形の兄哥あにき、あのお神さんを縛ったものだろうか」

自分の家の方へ帰って行くお仙の後ろ姿を見送って真砂町の喜三郎は言いました。

「いや、あのお神さんはこの上もない善人だ、決して人を殺す女じゃない」

平次は何やら考えております。

「だが、お神さんより外に、お駒を殺す者はないことになるぜ」
喜三郎はなかなか諦めません。

「襦袢二枚と、薄綿入を着ている人間を、後ろからたた一と突きで殺せる女があるだろうか」

と平次。

「フーム」

「お駒は声を立てず、苦しみもせずに死んでいる。あれだけの業をするのは、男でもよほど力のある者だ。お仙のような華奢な人間では、綿入を通すだけでも六つかしい」

「――が、下手人はどうしてもあの家の者か、あの家へ自分の家のように出入する者だ」

喜三郎も屈してはいません。

「房五郎か、でなければ定吉か——ということになる」

「房五郎は浅草に居た、——これは新吉よりもっと多勢の人が証人になっている」

「定吉は竹田人形の小屋の中に居た、——お仙は嘘を吐くはずはない」

これで事件はハタと壁に突き当ってしまいました。

「とにかく、明神様まで行つてみるとしよう」

平次と喜三郎とガラツ八は立上がりしました。事件が容易に目鼻が付きそうもないので、与力の笹野新三郎は、とうに八丁堀へ引揚げてしまったのです。

「ここから明神様の境内まで、女の足で、四半刻足らずで行つて来られるかどうか、一つ試してみるんだね」

八五郎は寒空に毛脛けずねを出し駆け出しそうにしております。

「お仙が駆けたというのかい、——毛脛を出して」

と平次。

「へッ、正に一言もねえ」

無駄を言いながら明神様の境内に着いた時は、もう陽が落かけておりました。

裏へ廻つて、その頃評判を取った竹田人形の木戸を入ると、寒い時分で、さすがに見物がチラリホラリと居るだけ、人形の生けるが如き姿態が、夕陽を受けて、無気味な艶めかしさで人に迫るのでした。

小屋をひと廻り。

「節分の晩はどうだったえ」

平次は小屋の者らしいのを捉まえて訊くと、

「あの晩は峠でしたよ、よく入ったもので」

そんな事を言つて大して忙しそうもなく、裏の方へ消えてしま
いました。

竹田人形は小栗判官照手姫十二段返し、わけても照手姫の松葉
燻^{いぶ}しが良い出来で、梁^{はり}に吊られた照手姫の、苦痛に歪む姿態の悩
ましさ、白い脛と赤い裳^{もすそ}に、メラメラと絡みそうになる仕掛の焰
の凄まじさ、乱れ乱れた髪、蒼白い——が妙に人を牽^{ひきつ}付ける顔、
乳の上で縛った荒縄など、極めて変態的ながら、たとえようもな
い艶美なものだったのです。

「なるほど、これは良い出来だ」

そんな事を言いながら、小屋の後ろの方、見物人のために作つ

た、よしずばり葎簾張の便所の側まで行くと、平次は黙って突立つたまま、しばらくは動こうともしません。

「あれを押してくれ、八」

「へエ」

ガラツ八は少し這い加減に葎簾の下の方を押すと、そこだけは、杭と縁が切れて、手に従って、かなり大きい穴が開いて行くのです。

「ここから人間が潜って出て、そつと入られない事はあるまい」
平次の静かな言葉は何もかも解決してしまいました。

「やはり、あのばかか」

と喜三郎。恐ろしい失望とも屈辱ともつかぬ感情が、三人の顔

を硬張^{こわば}らせませす。定吉にうまうまと担がれた馬鹿馬鹿しさを、つくづく感じ入ったのでしよう。

「さア、引返そう」

「無駄だ」

平次は黙って夕靄^{ゆうもや}の中を眺めております。

「どうした、錢形の」

「先刻^{さつき}は気が付かなかったが、定吉はもう生きてはいまい」

「えッ」

「とにかく、行ってみよう」

平次とガラッ八と喜三郎は、今度は何の遠慮もなく、夕方の街を駆け出しました。

三組町に着いて、房五郎の家へ飛込んだ時は、平次が予言したように何もかも終っておりました。

房五郎が二階で寝ているうちに、女房のお仙は連れ子の定吉を殺して、自分も死んでいたのです。

定吉はこの世で一番信賴する母親の手で、死ぬまで何にも知らずにいたことでしょう。二挺剃刀かみそりで後ろから咽のどを切られ、血汐しの海の中に突つ伏し、お仙はその上に崩折れて、これも見事に生う害やがいしていたのでした。

房五郎の驚き——いや、そんな事は書くまでもありません。

*

「八、相変らず絵解きを聴かして貰いたいと言うのだろう」

帰って来ると、熱いのを一本つけさして、平次はこんな事を言いました。

「へエ、先刻からウズウズしているんで」

八五郎は前へ乗り出して膝小僧を隠します。

「何でもないよ。新吉、岩松の兄弟はとんだ仕出しき。だが、あの二人はなんとなく好きなのところのある人間だよ、——それよりも惜しいのはお仙さ」

「お駒は」

「お駒は房五郎の娘だ、恐ろしく悪い女だ。あれほどの容きりよう貌で、

智恵の足りない定吉を玩具おもちゃにしていたんだ。火遊びの遊びが過ぎて殺されたのさ」

「……………」

「お袋を待たして見世物へ入った定吉は、あの照手姫を見るとラムラとお駒を思い出したのさ。便所の側から飛出して帰ると、岩松が帰ったばかりで戸口には手拭ほうしに包んだ切出しが落ちている。それを拾って入って、一たん押入へ投ほうり込んだが、お駒にからかわれて、急に殺す気になったんだよ。根がばかだからたまらない、ゲラゲラ笑っているお駒の背後うしろから双手突もろてきにズブリとやり、そのまま見世物へ帰って、先刻の穴からもぐり込み、表から出て母親と一緒に帰ったんだ。お駒の死体を見て急にはしゃいだのはそ

のためだよ。萎^{しお}れてみせるほどの智慧はないんだね」

「親分、見ていたようだね」

「それより外に考えようがないよ。あれはばかだが、恐ろしく悪賢いところがある」

「お仙が定吉を殺したのは？」

「新吉でなく岩松でなく、自分でないとするとお駒を殺すのは定吉より外にない、見世物小屋の外で待っていて、あんまり長かったことや、定吉の様子が変だったことを思い合せて早くも感付いたのさ。番所から帰した時の顔色はなかったよ、あの時気が付くとよかったが——」

「……………」

平次の顔はありありと悔恨の色が動きます。

「歸つて定吉に訊くと、定吉は母の前だから、ペラペラ喋つてしまつたのさ。定吉の性質や、お駒との関係も知っているので、お仙は何もかも読み尽して、哀れな子を処おしおき刑にされるよりはと、女心の浅はかな親子心中をしたのだろう。智恵が足りないと判ればお上にも御慈悲があつたろうに、——お仙は可哀想なことをしたよ」

平次は暗然としました。この事件は後々までも平次の心持を暗くした様子ですが、その代り新吉岩松という二人の友達が出来たのを、どんなに喜んだかわかりません。

青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（一）平次屠蘇機嫌」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年5月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第一巻」中央公論社

1938（昭和13）年11月1日発行

初出：「オール讀物 第五卷第二號」文藝春秋社

1935（昭和10）年2月1日発行

※誤植を疑った箇所を、「銭形平次捕物全集 2」河出書房、195

6（昭和31）年5月31日初版発行の表記にそって、あらためました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2018年6月27日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

人形の誘惑

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>